

(益大夫は
益田右衛門
介)

乍遺憾無是非何れの道人なくては何事も出来不申に付今晚にも不得止御
決心之事に候は、御同意可仕段申置候を相分れ申候其後下坂之事に付如
御書中未定と折角相考居申候木村三郎も此度の失策を大に爲天下遺憾に
存候趣に是非於浪華十分に益大夫へ論しに落答と申居候君を助けかゝ
る大事を爲 神州御擧げ被成候を彼式の事に御當惑之形色有之候は外
列藩内御國元内外ともに御處致は相着き不申大夫不似合の御事と頻に申
候下坂の上如何相成候哉何れ何と歎相決し可申候浪士御遣しの義は於弟
も至極よろしく事と奉存候其余の義何も拜鳳之上御談可申上候實に御高
慮相窺度兎角かゝる調子に非はきのふ二上りけふ三下りと申氣味に甘
く狂言も出来兼可申と存申候死毛生も反復と目しられても因循と目しられても百姓になりても
乞食になりても穢多に落ても都合一身の事に付けふの日には絶る豪傑ら
しく被思候を榮と致し候譯に非もこゝろよからす七百年前之古へ回し御
父子様の御苦勞も此上とも千辛萬苦是非

皇室御回復之御一端を御立被爲成候歎百萬一思召通りに貫き不申節は湊
川之役を手本に千歳に御誠忠日月とならひかゝやき人の大倫を無窮に御
維持被爲遊候外は有之間敷毫厘も勢や功や力を争ひ候姿に相成候は乍
恐天下之もの三星之御旗を顧み候もの少く此往の處致は萬端一入深くこ
ゝろを用ひ不申は相濟間敷事に歎と思考仕居申候何も筆頭には難盡萬
拜鳳の期と申縮候頓首奉復

念十

如山老兄拜復

木 圭

(如山は寺
島忠三郎な
らんか)

引繼不一形御配慮と奉恐察候さては兼て御願申候具足師對州屋敷之土井
良藏と申仁之方へ早急罷越候様鳥渡御家來に御通被遣候様奉願上候必
々無延引奉願候先は其爲差急勿々頓首拜

二十四

木戸孝元文書卷三 (文久三年六月)

三百七十五

京都も昨夜より何か會薩は不及申大騒動致し候肥彦其外類に西へ向ひ
出かけ申候

(北條瀨兵衛)

北條老臺御直

圭 木

御手紙拜誦仕候昨宵真木翁も來訪故肥藩周旋一事も粗相談翁も余程掛念
之様子被相察候得共必竟彼一舉翁至極同意の事に付先米藩においては夫
丈夫と相心得候油断に肥藩之周旋をとめ疑念を解き候手段まで行届兼
々の處只今老兄の御氣遣の邊相伺候は實に此儘差置候は機會を失し候
事に付兎に角御相談仕するは不相叶に付追付八新樓へ伺罷出候間左様
御承知奉願候奉復

六月念四

(中村翁は
中村九郎、
八新は京都
の八新樓な
り)

尙々中村翁と些閑談仕度付八新へ可罷越奉存候處坐敷狹溢に暑さに
難堪候故人三樹と出かけ申候御推察奇妙奉感服候中翁結髪中故相濟せ

候て可罷出候由

塗抹亂筆御推覽奉願候

(寺島忠三郎)

寺島老兄奉復

木 圭

(山田勘解由伊丹藏人
真木和泉)

朶雲一讀實に不堪悲泣候如貴論外患内憂此折柄にのそみ四方八方に狐疑
よりして不平心を御醸被成候は所詮中興之御大業何とも奉恐入候次第
に御座候今朝山田伊丹一件真木翁同行三條殿にも委細奉歎願置候處又候
肥論よりして狐疑之説を建御役向を御迷はせ申候は不相濟越老之心事
無疑段は今朝真翁にも弟縷々相談し置申候弟も至此實に不平に不堪萬一
可疑確證有之候は、此上は無是非長州に探索被仰合候様相願候歟又前に
相伺候る單身御互三四人之中越州に罷越老公に面謁其證を以旨趣相糺し
眞に不良之企有之候は、無余儀斷然大に其罪をならし有志一人にても遂
所置不申は相濟間敷於弟は別には更に一論も無之候間此度之儀何分に

も老兄此旨趣御承知被下候は、眞木翁被仰合可然御處置奉願候越州行は
つまり兄と弟致候も不咎萬一不良之志無之節は奉向 朝廷一國不平之
こゝろを抱かせ不申却天恩を奉感候氣鋒を付け候は今日之一功業に御
座候のみならず聊報恩之一端歟とも奉存候幾應にも此段老兄御勘考被成
下候も吳々翁被仰合早々可然御計らひ奉願候奉復

六月念六

尙々戊午歳越老大に天下之事を憂

大君の御言よしあらは

ますらをよとくはせま

いり奉るへし

との詠有之弟頂戴仕居申候其上昨年来之改革に付候も力のおよはざ
るは是非なし心におゐては不憐廉不少様相考申候先達より風説に承
り候には至今日格別手段も無之只浪華に事有之候得は父子之中一人は

(佐々木男也)

早速出張 天恩之一端に奉報のみと一定仕られ居候と申事眞偽は得と承
知不致候得とも其説有之申候丸に偽とは於弟難被思今日之患は實に狐疑
よりして人心を離し候儀不容易其とて毎日々々世間狐疑之世話のみも相
成兼候に付御根本に得と御心被爲用候之外有之間敷何分にも眞木翁と御
一決被成下候様吳々奉願候於弟は本文之外別に一論絶る無之候
三白今朝眞木翁にも越老公之事は相談し置候に付何卒佐々木兄被仰合
眞木翁の得と御談合奉願候本文之論に決候は、老兄とつまり御同行可
仕候

(寺島忠三郎)

寺島 老兄御密披

木

圭拜復

一筆致啓達候然々齋藤篤信齋門人佛生寺彌助三刀谷一馬事不容易趣致出
來浪士中申合過る廿二日夜中召捕候付御屋敷内板園へ被入置候處篤信齋
弟齋藤九一郎義此節滞京中に付何卒右兩人の者を九一郎へ御引渡被仰付

被下候様一統より別紙之通嘆願仕無余儀次第に付監物様申上願之通同廿四日夜及引渡候且御當家へ致寄宿居候浪士之内五島萬歸一出儀次郎事佛生寺其外申合不法の所行致候由に同夜浪士中より召捕候付同様板圍へ被入置候處組合吉田吳郎其外四人へ御引渡被仰付候様是亦別紙之通嘆願仕候付同廿五日及引渡候篤信齋門人高部彌惣雄事佛生寺其外同類の由候處孰へ逃去候哉行衛不相知段北村北辰齋其外より相届候於趣は日載に相見候付不具候此段鞞負殿へ被仰上可被下候右爲可得御意如是御座候恐惶謹言

六月廿七日

桂 小五郎

中村 九郎

村田次郎三郎

宍戸九郎兵衛様
麻田 公 輔様

山田宇右衛門様
山田 亦 介様
天野 謙 吉様
中村文右衛門様
秋村 十 藏様
中村 誠 一様

(清旭は中村九郎)
(大田は大田市之進)

過刻御談申上候次第清旭翁へ御傳言奉願候無間大田も罷越浪士一條相談じ候に付御嘶仕置候通取計らひ可申と奉存候尤弟別に用向出來仕候に付今より一應外出仕候間老兄には必無御用捨何時にても御光來不苦奉存候間夕景にも相成候得は随分凌よく御坐候間御出浮可被成候御都合次第浪士御同様に候加入候はいかゞ哉先は爲其勿々頓首九拜

念七

三郎 村田次郎

木戸孝元文書卷三 (文久三年七月)

松屋老兄御直

木 圭

三百八十二

拜啓彌御清適奉大賀候未得拜青勿卒呈上奉恐入候得共内密承候儀も有之候間ちらと御相談申上度と奉存御様子相窺申候尤只今に限り候儀には更々無御坐候得共御來郎之由承知仕候に付乍失敬不取敢申上候拜具頓首拜

池尻 様内呈

木 圭

池尻茂四郎にて久留米藩の人なり

一筆致啓達候然は爰許諸器械不足に付御地之分取寄せ之儀先達も得御意置尙此内河野理兵衛被差返候節も及御催促候通至る差急き候付御疎無之事には候得共早々送方之御運可被下候御國よりも追々御手當として多人數被差登候付は尙更急速に取揃置不申は不相成候處屬具類不足之分有之別紙之通器械方より申出候付差越申候間向々被成御沙汰早々送方相成候様御取計可被成候且差當り御用には難相立大砲數挺麻布御屋

舖に有之様相考申候早々御取調被成候御國の送方相成候は、新規御製造之御益にも可相成其外不具之器械にも御地御有合之分は不殘急々御國送方相成候様尙若林御藏入之合藥是亦不殘送方之可被成御沙汰候尤合藥之儀爰元之兼御手當申候分至る纒々に付右之内御見計を以御取分け御送方可被下候右爲可得御意如此御座候恐惶謹言

七月二日

桂 小五郎

中村 九郎

村田次郎三郎

尙々六封度破藥仕立玉之儀も別紙之通御見計を以爰元送り方之可被成御沙汰候以上

波多野藤兵衛様

○

覺

木戸孝元文書卷三 (文久三年七月)

三百八十三

波多野藤兵衛は長藩士なり

一六封度打銃三ツ

一同照尺三ツ

一同タス三ツ

一同ヘイヒイスタス三ツ

一同玉取七廿三通リ

但柄之儀は於爰元仕調候事

一火門針六本

一指袋三

右之通京都御屋舖御入用有之候間江戸大御納戸亦は有備官之間御有合御座候は、御急便を以御送方相成候尤右之内照尺之儀は於京都難相調候付御有合無御座候は、神田柳原に於小澤徳次方之注文相成新規仕調早々御送方相成候様御詮儀可被下候事

六月

京都

器械方

覺

一六封度破薬仕立玉之事

但麻布御屋舖上馬場御藏大御納戸受之内に數拾發有之候處未御國送方不相成候は、送り方之事

一合薬之事

右之通江戸御有合之分大廻り船便を以早々送方相成候様御詮儀可被下候事

京都

器械方

六月

(吉川監物)

一筆致啓達候吉川監物様此度御出府之儀に付は勿論御兩殿様御思召被爲在候御事には可有御座候得共監物様御意内をも御承知被成置候は、御

木戸孝允文書卷三 (文久三年七月)

三百八十五

都合も可然哉与奉考清水清太郎其外御旅館罷出相窺候處於監物様も種々御案思被爲煩候御様子縮る處只今に有は

朝廷御用中之事に付幕府之御沙汰筋危忽御請仕候様難相成乍然

御兩殿様御差圖次第に有此余進退如何様共可仕と之御決意之趣被仰聞候付左候は、右御決意之趣早速御國表に申越候様可仕段申上候處其通取計可然と被仰聞候幕府御用筋如何之儀に可有之哉不相分候得もど攘夷一條に付有は昨年来

御兩殿様より追々委曲に被仰建今日に至り何社御尋可相成廉も無之第一監物様御滯京之儀に付有は肝要之御用筋被爲蒙候段は於幕府も得与御承知之事に候處此度之御沙汰振對朝廷御條理不相立儀にも有之尤

朝廷に御断立相成候有之事に有も可有之哉未御窺も不仕候得共多分は御押付之御沙汰には有之間敷哉与被相考候間爰許之評議に有は監物様御出

府之儀は是非御断相成御家老之儀も只今に有爰元御用に有滯留之事に付關東之事情得与見定之上緩々出立相成候有可然哉与決着仕居候旁之趣備前殿其外被仰達監物様御意内之趣は委曲被及御聞爰元評議之次第は各様御考案之御一助にも相成候様可申進由上總殿之申事に御座候恐惶謹言

七月七日

中村 九郎

桂 小五郎

郎田次郎三郎

宍戸九郎兵衛様

麻田 公 輔様

山田宇右衛門様

山田 亦 介様

天野 謙 吉様

中村文右衛門様

高杉晋作様

秋村十藏様

中村誠一様

○

兩三日御疎濶昨日は最盛會之よし御浦山敷奉存候さては今明日之中御閑隙之節拜鳳御相談申上度儀も有之候間御差繰被成下候得は無此上奉本懐候爲其勿々頓首拜

七月後一日

寺嶋老兄御直拆

木 圭

(寺島忠三郎)

○

(真木和泉) 華翰奉拜誦候昨夜及早晚之通り大失敬相働き奉恐縮候今朝真木にも罷越大兄御面談之義申入候所折角彼も相願候所に御座候乍然今日は終日前約

も有之候事に寸隙無之趣に申居候今より大場一真齋相尋候て東可申上と奉存候處預御尋候に付一應御答申上置候委細は拜 鳳萬可申上候且又朝鮮紬頂戴被仰付毎々預御惠與却奉恐入候いづれ登門御禮可申上候爲其勿々奉復

七月後一日

大嶋大兄奉復

木 圭

(大島友之丸)

○

兩大兄へ是非拜眉御相談仕候御決斷を相願度奉存候御閑暇被爲在候は、弟いつれまてなりとも罷出可申何分の御答可被下候頓首拜

十七日

男也 兩大兄

忠三郎

小五郎

(佐々木男也寺島忠三郎)

○

拜啓彌

御壯榮とは定法僕のおきまりなれど御相違無之事と奉存候故伺申候さては兼る御同論を一擧いづれ不遠實行相立不申るは相成間敷と愚考仕中昨宵粗御嘶仕候通御國より新登之人とは相違も難計其上議論多端にては所詮貫徹之ぐわへ十分ならず去今更相止め候心底は決る無之事に付力之および候丈けは一筋に盡力仕候心得御座候老兄方如何被思召候哉御工風被下候置候は、拜眉之上得と相伺可申候於弟は此他に出候事は有之間敷と存居申候萬一新登連と兩端に相成候節は其覺悟無之るは不相叶候間一往申上置候先は爲其勿々頓首九拜

十九日

尙々宇治之清流と石山之明月は又人生之一壯觀に付

各大兄之御仁惠を以二日之閑暇御周旋被成下候奉願候頓首

佐々木

木 圭

（佐々木男也寺島忠三郎）

寺島 二大兄御密披

○

覺

齋藤篤信齋門人

北邨 北辰齋

右無據用事有之其御地罷下度段相願候付被差免今日當京師出足被差下候間用事相濟出足之義申出候は、可被成其御沙汰候此段各様迄可申進由彈正殿上總殿被申付如此御座候以上

七月廿日

桂 小五郎花押

中村 九郎花押

波多野藤兵衛様

御面書之通致承知候北辰齋無異義致到着候以上

九月十二日

奥平 數馬花押

木戸孝允文書卷三（文久三年七月）

三百九十一

福原與三兵衛花押

中村 九郎様
桂 小五郎様

（彈大夫は益田正に
し上杉は米澤藩主上
杉彈正大弼齊憲なり）

明朝にても御間隙御座候は、得と御相談仕候尙御氣付も有之候得ば逐一
承知仕度奉存候間乍御面倒何分之御様子御一答奉願候さて又今日彈大夫
上杉御旅館へ被參余程隙取申候いか、之都合に有之候哉且又閣老より差
出し候書付彈大夫歸邸之上披見に相成候哉是又如何之御様子御承知に御
座候は、乍序承知仕度奉存候爲其勿々頓首九拜

七月廿一

塗抹之亂筆御推覽可被下候拜

江月齋老兄御密披

（江月齋は久坂義助）

廣 寒

（大田は大田市之進）

何分にも老兄へ丸々御願仕置に付御取捌奉願候拜
七番へ直に大田罷越候得とも少しく掛念に御座候故手付のものを遣し爲
窺候處些大田にては力及び兼候歟典藥頭立合之上武士道に行ひ候と歟申
きり居應接六つヶ敷様に被相察尙又典藥頭も類に呼に遣し候よし邸近邊
のものはむやみに暴威のみ示し候は甚よろしからず且又浪士連是式之
事に決心の何のと強申候ほどの事も有之間敷歟と被存申候彼之方にも
十一分に詫候上速に許し候方可然何卒老兄乍御苦勞御説得奉祈候勿々頓
首拜

念二

御推覽可被下候以上

江月齋老兄御親拆

（江月齋は久坂義助）

廣 寒

御内拆

木戸孝元文書卷三（文久三年七月）

三百九十三

別紙重々御断有之候に付此まゝ入御覽申候御寫ども被成候は、本書にも御寫之分にてもよろしく御序に御返與可被下候奉願候○且又至極申兼候得共朝鮮つむき五疋にも七疋にもよろしく自然御求め相成候は、奉願度御手数之義奉恐入候兎角蒙御惠投實に御願も申上がたく萬々一も御惠投之譯御座候ては一疋にも必々御断り申上候逐々まゝ奉願候儀も可有之候間當りまへに偏に奉願候自然別に御配慮御座候は弟之本意に無御座候間不言已前に絶る御断申上候乍然此せつ右等之もの舶來不仕候得は決る御心配不被成下様奉願候吳々も弟之願意之まゝに無御座候は誓る御願は不申上候敬白

廿三日

○ (此書は宛名署名共に闕くも文久三年七月木戸孝九が大島友之允に贈りたるものなり)

久坂玄瑞事束髪被仰付候付是まで之名にゐは外向差湊之筋多く早々替名

仕度段別紙之通願書差出候付差越申候間可被成其御沙汰候委細日載に相見候通に御坐候

御面書致承知候願書文言調旨之義も有之候付添削支配方は相渡申候間右様御承知可被成候恐惶謹言

八月五日

○ (此書は文久三年七月十八日木戸孝九中村九郎より尖戸九郎兵衛麻田公輔等政府員に贈りたるものなり)

(鳥取藩主松平相摸守慶徳)
(長嶺内藏太山縣半藏皆長藩士なり)
(吉川監物)

一筆致啓達候松平相摸守様より御使者安達清一郎を以別紙之通監物様御答被仰進候右は先達る長嶺内藏太山縣半藏爲御使者被差越候節御答之儀は御國元可被仰進御挨拶に候處此節監物様御滞京に付御彼方は被仰進候様にと申置候付罷出候段及演説候由右に付相摸守様には追々國事に付御相談被仰上候可然次第に付監物様にも御出被爲成候様申上置御周旋懸り之面々も可及談合積に罷居申候此段各様迄被仰達被及

御聞候様彈正殿被申付如是に御座候恐惶謹言

七月廿四日

中村 九郎
桂 小五郎
來島又兵衛
村田次郎三郎

宍戸九郎兵衛様

中村 誠 一様

御面書之通致承知別紙相達候付御當役方申達被及

御聞候以上

八月五日

中村 誠 一
宍戸九郎兵衛

尙々別紙留置申候以上

來島又兵衛様

中村 九郎様

尙々本文之通大衰弱に付今日登

殿不得仕兩三日何卒御容赦奉願候勿々

御面書奉拜承候委細之趣更に氣付無之御同意御座候間無御用捨御取計ら
ひ可被成候夕景に相成候得ば樓上も余程凌よく相成候間何卒御光來奉待
候弟は一昨夜之吐瀉に於大に筋骨え障り眠り込み候様なる心地仕候に付
一奮發仕後刻湯淺小六と乗廻しを相約し置候尤宇喜田えも鳥渡參り候
中川宮様えも罷出伺吳候様相頼候心得に御座候其中御氣付も候は、被仰
聞可被下候奉復

(別紙云々
は中村九郎
自筆なり)

別紙之通御沙汰相成候は如何哉御氣付無御座候は、其取計可仕候別封
は九一郎より差出申候御熟覽被成置可被下候委細は追付參寓面盡可仕候

以上

廿五日

尙々不堪熱苦候へとも村田同道追付可罷出候乍妨御嘶可被成遣候

(此書は文久三年七月の頃木戸孝九が中村九郎に贈りたるものなるが如し)

一筆致啓達候吉川監物様此度御出府之義に付るは勿論 御兩殿様御思召被爲在候御事には可有御座候得共監物様御意内ホテをも御承知被成置候は、御都合も可然哉と奉考清水清太郎其外御旅館罷出相窺候處於監物様も種々御案思被爲煩候御様子縮る處只今にホは 朝廷御用中之事に付幕府之御沙汰筋愈忽御請仕候様難相成乍然御兩殿様御差圖次第にホ此余進退如何様共可仕との御決意之趣被仰聞候付左候は、右御決意之趣早速御國表へ申越候様可仕段申上候處其通取計可然と被仰聞候幕府御用筋如何之義に可有之哉不相分候得ども攘夷一條に付るは昨年來 御兩殿様より追々

委曲に被仰建今日に至り何祐御尋可相成廉も無之第一監物様御滯京之義に付るは肝要之御用筋被爲蒙候段は於幕府も得と御承知之事に候處此度之御沙汰振對 朝廷御條理不相立義にも有之尤 朝廷へ御斷立相成候之事にホも可有之哉未御窺も不仕候得共多分は御押付之御沙汰には有之間敷哉と被相考候間爰許之評議にホは監物様御出府之義は是非御斷相成御家老之義も只今にホ爰元御用にホ滯留之事に付關東之事情得と見定之上緩々出立相成候ホ可然哉と決着仕居候旁之趣備前殿其外被仰達監物様御意内之趣は委曲被及 御聞爰元評議之次第は各様御考案之御一助にも相成候様可申進由上總殿被申事御坐候恐惶謹言

(尖戸備前)

(根來上總)

中村 九郎

桂 小五郎

村田次郎三郎

(此書は文久三年七月木戸孝九中村九郎村田次郎三郎より尖戸九郎兵衛等政府員に贈りたるものなり)

木戸孝九文書卷三 (文久三年七月)

尙々今晚條卿へは參上可仕と奉存候處會備因上杉阿の調練 上覽被爲
遊候御様子にて容易に御歸殿も難被計候間明朝と決申候拜

（酒井傳次郎は久留米藩の人士にして淵上郡太郎も同藩なり）

明朝酒井傳二郎御同道被成候（鳥丸萬里小路兩卿へ御出被成弟は淵上同道仕候（三條卿より萬里小路卿參り老兄方と御落合仕一同 中川宮へ參殿仕候様御約し置候（只今罷歸り候に付乍御苦勞其御都合無失機奉願上候勿々頓首拜

八月五日

寺島 老兄御内披

木 圭

（寺島忠三郎）

拜啓過刻は御妨申上候さて今日も六日と思ひ候得は七日に實に日月如流またしく間に三日や四日は相立申候此度御同様に盡力仕候一大擧も凡遅くとも廿日頃までには相運ひ不申（は不相濟是非とも其を目途に周旋

盡力可仕と奉存候就（は凡之出陣詮義等もちくち内々仕置不申（は不相叶斷然御決心之事に付大抵之事は御捨置被成一先瓢箪路じの明き宅へ早々御轉居被爲成候（はいかい哉何分にも此上者諸事迅速に相運ひ不申（は却（る大事も水の泡と相成申候と掛念仕居申候其中御手透ども御座候は、御出かけ奉待候頓首九拜

八月初七

草山 老臺御直披

木 圭

（來島又兵衛）

（淵上郡太郎）

（泉州は眞木和泉）

別紙淵上より相投じ一見實以驚入候事に付御請無之（は天下之事是より相破れ候付是非奉 命無之（は不相叶彌奉 命無之候得は御同様に屹度一工夫無之（は不相濟其中明日まで之處乍御苦勞老兄御請持泉州へ御助力何分にも此義貫徹不仕（は不相叶候弟も今朝來奔走少々乍赤面相疲れ居候付明日は早く歸京可仕候とに角些此事はこん氣御同様飽まで徐々不

木戸孝元文書卷三（文久三年八月）

四百一

相撓彼 宮へ相扣居候位に無之は所詮十分に貫徹不仕實に此宮御辭退に相成候と姦徒一入氣を得天下の事相止候に付何分にも十一分に泉州御助け明日迄御持張奉願上候其中罷歸御高論も相窺候右申上候通一工風相廻らし不申は萬々不相濟候先は爲其取急勿々頓首九拜

八月九日

五郎

寺島忠三郎

忠三郎老兄

昨日去御手紙御投下奉拜誦候其節は御使勿々罷歸り候付御答も不仕候處其後御不快如何被爲成候哉御案し申上候幾應も御引しめ被成御加養無之は隙取候間申上候までも無之義に御座候間此節の事に付一入御念を御入被成迅速御全快之御手段肝要に御座候さては鎮西一條未相運ひ兼甚氣せき申候得共先夜烏丸卿へ罷出御直に相伺候事も有之候故此機に二之大事一時に相舉候得は無之上の事と奉存候付其後の形勢相窺居候處不計

迅速に相運ひ昨夜 御親征之儀も

來島又兵衛

御宸斷之趣内々被 仰出重疊難有御事に奉存候就は此上は今一大舉片時も速に相運ひ不申は不相叶此儀何分にも泉州老人荷ひ吳不申は相運ひ不申かく相成候は一刻も差急き申候于時一の難溢出來其譯は來島并狙撃隊を今日に至りとめ候論出來致候歟に被察申候實に人情を不知なさけなき説に有之申候必功名を貪り候人有之申候臨大事かゝる事にあは浩歎之至に御座候兎に角得と御相談不仕は不相叶尤只今と申事には無之候間今日も御全快に無之候は、緩々御加養幾重も速に御快氣の御手段申上も疎に御座候昨今の様子御通し申上度勿々頓首拜

十三日

木 圭

寺島忠三郎

寺島老兄御密披

今朝より周旋仕候先刻歸り申候老臺御用多に御座候得は御閑暇に得と

(寺忠は寺島忠三郎)

諸事相窺度何にしても第一の御一決未半途に付何分にも此義迅速御運ひ無之のは不相叶寺忠も氣遣居候處先刻御漸之御口氣を承知仕大に安心のよし弟も同様之事に御座候先は爲其勿々頓首拜

八月十三日

尙々御都合次第今晚にても相窺可申候必々御用捨なく奉願候拜

(來島又兵衛)

木 圭

草山 老臺御内披

(九郎は中村九郎龜之進は來島龜之進)

御面書奉承知候引續不容易御周旋御苦勞之御義と存候今晚緩々拜話可申上候只今まで大夫御兩人之所に九郎一同議論も仕候處人數半方倅龜之進へ付添候る宮様御供仕残り半方四十人を以私在京仕候様との義是が高論と申事に御座候へ共未私御請不仕第一根本論相定候上處置可有之候以上

則

木 圭 様

草 山

○

今晚より之御立實に意外之事にる何とも當惑至極申上様更に無之一同力を落し申候乍去無是非事弟等は成丈盡力可仕候然しか様相成候天下之事も目途無之御内輪も自から兩端相成候様之姿弟一大夫之了簡も合點に入不申いづれ軍法決しられ不申るは合一に相成兼候よし何となく悲泣之至に御座候然し其は喋々申上候とも盡き不申

有栖御發し之都合に相成候るは差當り金の事はいかゞ可仕候哉且又私共差向出立も難相成次第御工風被成置被遣候様奉願上候先は爲其勿々頓首九拜

八月十五

尙々今日之有様言に言れぬ處有之定る老兄には頓に御察しの事と奉存候此勢つけ上り候といづれ五人や十人は血を出さすては相濟申間敷と

只々爲國家痛歎仕候拜

草山老臺

寺島
木圭

（來島又兵衛）

尙々金は成丈十分に被仰談度如此機は無之候 御當家御用きゝのみならず一體惣して富商どもへ追々從 朝廷被仰付方之も工夫專一と奉存候拜

（寺島忠三郎）

伏水より之御書翰今朝郵田所に拜見仕候昨日は何歎匆卒に御別れ申殘念に奉存候寺島も御途中に拜鳳仕候由折角罷出候事故得拜鳳旁都合よろしく奉存候さては 御親征一條に付浪華富商より御かり上之分些少くどもも無之哉斷然十分に富商どもへ被仰聞候ゝまいか、哉此後は逐々從 朝廷御直に富商どもへ御用金被仰付べき事に無之ゝは不相叶候ゆへ得と

御説諭御見込之義も有之候は、被仰越可被下候 有栖之宮へも昨日被 仰出どふ歎御都合よろしき様に奉窺候此上は一日も速に相運ひ不申ゝは不相濟候此上趣も有之候は、早々可申上候先は爲其勿々頓首拜

八月十七

木圭

來翁様

（來島又兵衛）

過刻は得拜談奉本懷候さて其より直に木邨翁と面談七卿御内々一條現書は翁所持老兄にも御承知にもと存候別番之儀に付攘夷陳情之議論も有之至極尤と被相考候委細は翁より得と御承知被下候様仕度先刻御談仕候通於弟は速に國論益一定之策被相立於爰元は無一物所を暫相示し候方萬々可然と奉存候況哉學習院に度々罷出候もの益嫌疑有之候事に付願はくは邸には丸々殺氣不相顯候方實によろしくいか程潛み候とも物有るときは

木戸孝允文書卷三（文久三年八月）

四百七

必相知れ申候當分は尙更之事に御座候然し弟は一旦滞り候上は元より街道に屍を曝し候とも必辭する所には無之候間外向之探索精々盡力可仕と存候實に君上難有も 皇威御回復に付カは高大之 思召に付大夫始容易抛ち一身を不思位を以中興之 大業を被誤候カは奉對 君上候カも不相濟尤も是は老兄にのみ申上事に付必左様御合置可被遣候弟之愚考大に相違仕候事も御座候得は無是非一身孤行痛泣之次第御座候幾應にも翁之御優待奉願候爲其勿々再拜

八月念五

尙々本文之儀は老兄にのみ申上候事に付左様御承知奉願上候明日は來中にも面會可仕と存居候間今晚之所はほどよく奉願候青木も今晚は相尋度存居候亂筆御推覽奉祈申候

寺忠老兄御密披

木 圭

(來中は來島又兵衛中村九郎) 青木は對州藩青木盛次郎なるへ

何卒何歟様子も御座候は、早々御聞せ奉願上候本文塗抹御推覽奉願候

□は餽字

拜啓御清榮奉大賀候さて久坂より承知仕候得ば老兄にも御歸國に爲成候歟之御様子大に失望□□何分にも此上は兼カ御沙汰之通忠節之二字を御確守被爲遊天地に誓皇室之御回復を目途に御盡力乍恐自然百萬一之節は楠氏湊川と御手本に 御忠誠千載照徹致しカ倫を無窮御維持被爲遊候之外は有之間敷と奉存候就カは御内輪屹度一定不仕カは不相叶實に難有も二州を抛ち勤王被爲遊候思食一旦之□□戊午年同様之姿と相成候カは奉對

□は不明

君上決カ不相濟臣等之罪無此上事に御坐候上下一致至誠を以天地に誓ひ

□は餽字

思召を奉じ斃而休之覺悟相定居候て必容易に外より破られ候事は有之間敷云ゆる栗の□□の諺(イカノ意カ)にカ一箇々々之私見を張り鎖々たる事よりして高

□は餽字

大之思食も□□貫徹不致自然内より破り候様なる事には相成間敷歟と

(久坂義助)

日夜不堪痛念候幾應にも忠節を以持詰候事肝要に候處持詰にと申事私見を張り候は決り出来不申當此時候は自分一身は度外中之度外にも生死は不及申乞食と相成候とも穢多と相成候とも二州丈け之勤 王之思食灰と相成候は決り不相濟灰となさるゝは只誠之一字之外之無之候昨夜久義より書を得彼は去所へ十分着眼大に安心仕候其中正義之藩は千辛萬苦仕候も連結仕是非々々外より應し吳候様盡力不仕るゝ不相叶是は意心傳心之場合に決り喋々と世間にて唱られ候事には無之候申上候までも無之候得ども老兄にも得と御勘考之處承知仕度□□□今日は水之大場へ罷越明日は阿の蜂須賀へ罷越可申と存居申候邸へは御無音申上候に付來中二氏へも都合よく御致聲奉願上候必此議論先御用捨被成置候様奉願上候只々老兄へのみ一應申上置候爲其勿々頓首九拜

九月四

尙々先達る來大黒屋に滞留不絶客來も有之始終酒飯等も出させ申候間

□は餓字

(大場一真)

(來中は來島又兵衛中村九郎)

(大黒屋は京都の今井大郎衛門なり)

□は不明

(村田次郎)

三郎 □は餓字

迷惑には不相成様致し置度此段御詮議相成□□□□何卒奉願上候御承知まで申上置候頓首

松屋 老兄 □ □ 披

萩 陰

拜啓過日は態々御光來難有奉多謝候其後鳥渡御尋申上候處折柄御外出中に拜鳳不得仕残念至極に奉存候其已後之光景も中々不面白何分にも此余之所は於

尊藩正義御維持被爲成候之外致し方無之實に於堂上方も有志之御方は正義地をはらひ邪説擁蔽於列藩も攘夷之議大に瓦解致し候も不少趣追々相響御浩歎之御方も有之歎之よし今日之遺憾中々筆紙難盡弟も近日より歸國仕候就るは是非一應 老臺へ拜鳳仕置不申候は不相叶先日大場大夫には御拜顔仕御高話承り歸國仕候得は今一應拜顔仕度に付推參可仕と奉存候間乍失敬御折も御坐候は、此段御通じ置被遣候様奉願候先は右御都

(大場一真)

合相窺度奉呈候爲其勿々頓首九拜

九月九

尙々世間瓦解仕候には太遺憾に奉存候就るは乍不及弊藩にも一入確守
不仕るは不相叶是は只々

老臺へのみ申上候儀に御坐候に付必御聞捨奉願度其故原氏之建言とか
に小倉之儀何とか御役向へ御申上可被下候

老臺如何被思召候哉有志之ものは血涙を押拭ひ候之外無之と申居候よし
承り申候天下正議のものも尊藩之御正議には兼る奉感服居候事に付實に
此時天下之正氣御作興無之は不相濟と奉存候何も拜鳳に都る申縮候頓
首

住谷老臺御親拆

木 圭

（住谷寅之助にて水戸藩の一人なり）

只今は御投書委細承知仕候弟も晝後は外出仕候に付返答有之候は、御披

見可被下候老兄には今日御立被成候哉且又今朝の來客いか歎の主意に御座
候哉元より疎漏は有之間敷候得共何卒御氣を被付度御事と奉存候是は老
兄迄内々申上候迄に御座候頓首拜

十日

木 圭

（日下は久坂義助）

日下老兄極内

御手帑奉拜誦候昨日は態々御光來奉多謝候さては今日御光來被成下候由
委細奉承知候鳥渡今朝正三卿へ罷出申候に付晝頃大黒屋まで乍失敬御光
來奉願度渡邊君も度々御尋被成下候由之所早曉も出違失敬千萬に奉存候
付折角是より可相窺と奉存候處御一同御光來被成下候得は難有奉存候先
は爲其勿々頓首奉復

九月十三

尙々今朝早速御答可申上之所取次之もの不心得に大失敬申上候よし

木戸孝元文書卷三（文久三年九月）

四百十三

御容赦奉願上候昨日御光來之節申上置候ケ條元より御疎は不被爲在候
得共何卒厚く御含み可然奉願上候頓首

小河 様拜復

新堀

（小河彌右衛門）
（新堀は木戸孝元の變名新堀松輔の略なり）

朶雲奉拜誦候早速參堂可仕と奉存候所薩會大に弊藩を讒し已に於國元寡君父子京都之御様子を承知仕候付不取敢根來上總と申候ものを以從來之寸誠可申上爲め上京致させ候處留守居添役兩三人之外御用無之に付早々歸國致し候様との御達於浪華承知仕候に付彼地へ相滞り此段申上候處於朝廷は大分御寛裕之御様子に相窺候得共二藩之爲めに屢相とめられ已に昨夜も勸修寺家より右一條に付達し有之候との事に御座候間留守居之もの今朝罷出候所昨夜半薩會二藩之もの近衛殿へ罷出何歟無實之事を申立讒訴致し候由に付右之御達御もどしに相成申候實に寡君父子拋國家千辛萬苦尊

王攘夷之大義に心を盡し不容易艱難仕終に姦人讒言の爲に誠忠も却る不忠不義同様と相成候而致し方無之就るは此余は是非なく爲神州に殉し候心得に而京地之事は打捨不申而は相叶申間敷血涙を押拭ひ西歸仕候心得に御座候右之次第に付不得止失敬申上候間何卒不惡奉願上候正邪は自から分明なる天地も可有之と安心仕候先は爲其勿々頓首奉復

九月十六

木 圭

小河 様内奉復

（小河彌右衛門）

昨夜は雨中態々御光來實に先日來不容易御高配奉多謝候さて昨夜御歸り後正三卿へ罷出拜謁仕候所讒訴彌貫徹所詮正義徹上仕候目途無之戊午來天下正義之士生かわり死かわり爲天朝名分相立候様盡力仕候も灰と相成悲歎無此上昨今京地に滞在仕候とも甲斐も無之此晚より斷然西下仕候心得に御座候乍去

木戸孝元文書卷三（文久三年九月）

四百十五

大内之雲霧をかへり見候は不覺血涙に袖をしぼり申候實に國家身命に
抛ち只管積年之
叡旨を御貫徹仕候様必死盡力仕候義無實之讒訴を以不忠不義同様之受御
所致候儀於臣子實に不忍至情に候得共是又寡君父子まで之事に候へし
が後來之光景爲

神州深く奉忍入候事に折角

皇威之張り候御機一朝に相破れ前途目途無之正義之士之氣を沮み候事筆
頭に難盡痛哭之次第に御座候心事御諒察可被遣候尙又私儀是非々々此度
は

尊邸へ罷出候心得に御座候所先日來寸暇無之無余儀失敬申上候間諸君へ
可然御致意奉願上候勿々頓首九拜

九月十七日

尙々實に國元之儀大に掛念仕候に付一先歸國仕様子次第又々上京可仕

と奉存候此間之所萬端御盡力奉願上候且又私儀近來丸に周旋不仕產物
にかり居先達亦已歸國仕と申折柄中川宮御西下之由奉伺候に付兼亦攘
夷御先鋒之御願之趣奉承知是非其節は御供申上度段も奉歎願置候位之
事に亦實に鎮西攘夷之義一致不仕に付大に掛念仕居候間是非御供可申
上と奉存候間此段言上仕候のみに亦近來自然と御役向へ出不申只烏丸
卿へ三度萬里小路卿御玄關へ一度罷出候位に亦此度御親征一條にも右
之次第に付堂上方始列藩へも出不申候所如何之事に御座候哉學習院に
亦參政方御詰所へ私姓名も張付有之候由に亦偏に暴論徒目視せられ居
候由元より今更辯解仕候心底は毛頭無之候得共實に前條之次第に亦格
別暴論相唱候覺も無之必竟之右之都合に亦は重亦上京仕寡君晴天白日
之赤心を訴候にも右之疑有之候は道も絶へ候譯に付乍心外自然と薩
會其外へ此疑は相解候様歸國中に御盡力奉願上度奉存候實に心外千萬
之事に御座候得共相成丈は必死に盡力仕是非寡君年來尊

王攘夷に心を盡し候儀爲姦人かゝる大疑を受け候は死するとも難忍候間誓ふ力之及び候丈は辯解仕晴天白日に不仕は不相叶候間不得止奉願候事に厚く御含み奉願上候頓首拜

(此書は文久三年九月十七日木戸孝九が小河彌右衛門に贈りたるものなり)

○

御父子様積年之御忠誠申までも無之處去る八月十八日京都存外之大變に實に遺憾無此上次第に付正義之處をたどり從來之御誠意申陳候折柄御國元騷擾之趣相聞自然萬一御誠意に障り候義有之候は不容易御事と奉存一先歸國仕候全體此方不束一度ならさる中抑昨年八月二日世子君

勅諭御頂戴御東下被爲遊候節眞に存外之事とは乍申必竟此方不行届よりして上之御明察は申上るまでも無之處

(大原重徳)

勅諭を被動就は大原殿御譴責も有之今日其趣分明に候得ども後年に涉り候事に付實に心中不安況要路に立深奉恐入候間四月已來御役御斷の義内願致し居候處先般不圖も御直目付役被仰付候恐入候に付御斷申上候義に付至于此實に片時も難堪奉恐入候得共不得止此譯を以其筋え申入數度及内願候得共御許容無之に付再應思慮仕候得共是迄屢人之非を責め而して己甘して相立居候に付不忍無之候間尙又此趣及内願候處所詮御許容之其上下之次第に付正氣相殿居候は要路に立其詮も無之滿城之士人に對し候ても顔色實に進退無道甚因窮目途無之仕候其とて今日の勢無視望觀も決る出來兼二百年來奉蒙高恩候付於于此はせめて一家を抛ち徹忠相盡し度奉存候斷然推御暇奉願候

(此書は文久三年十月三日木戸孝九が京都より歸國せし時藩主直目付役の要職を命せしを辭したるものなり)

○

今朝は御來光難有奉謝候陳は昨日相願置候赤間關異艦來泊一件新御殿に被差出置候分并長府應接書御明き次第纔時拜借相願度奉存候爲其勿々頓首拜

初四

桂

(奥平數馬)

奥平 様御内啓

○ 別封後に御返し可被遣候

彌御清榮奉賀候さては過日之飛脚便に別封到來披見仕候處案外之次第是等之事も得と承り糺し度き事に御座候且又得拜鳳一二ヶ條今一應御窺度義有之申候御都合次第御歸り掛御立寄奉願度奉存候爲其鳥渡相窺見申候勿々頓首拜

十月十

木 圭

(麻田公輔)

麻田 老臺御親拆

表諭敬承後刻罷出可申候京師近狀書は留置申候御別番之趣は早々相運可

申候以上

乃

麻 田

木 圭 老 臺

○ 昨晚は御光來奉謝候彌今朝より御歸萩被成候哉弟心中何分にも不安爰元長く留り居候心底は無之人に逢候も赤面に不堪せめては

君上御忠誠之處天下に暴白致し人之向背を定め候處なりとも盡し度此段御諒察被成下大夫へ御逢も御座候は、よろしく奉願上候勿々頓首九拜

十月十四

尙々早々御歸り奉待候弟も是非々々一度は歸萩仕度來良遺孤も氣にか

ゝり申候拜

久 坂 様御密披

桂

(久坂義助)

(來原遺孤
は來原彦太
郎等なり)

奉拜讀候何分にも御盡力奉願候さて今朝ちらと承り候得ば萩城に御上京
一條に付候ふはとふ歟大分相醸し居候事も有之候歟と被相窺申候御探索
且乍失敬御心得も被爲在候御事と奉存申上置候勿々奉復

十四

木 圭

日 下 様

○
(日下は久坂義助なり)

朶雲奉拜誦候弟も兩三日出勤も不仕昨夜御様子を相窺候に付折角今日ど
もは參堂可仕歟と奉存居申候委細は拜青ならでは盡き不申候先は爲其勿
々頓首奉復

十四日

木 圭

○
(岡義右衛門)

岡 老 臺 奉 復

拜啓今朝は御妨申上候さて心事は兼る御推察被成下候通他念は無之元よ

り弟も一身を潔よく致し候位之心底には無之御承知之通言に言れぬ心事
に在實に此往算之立候目途は無之候得共
御忠誠の疵付す千載に遺憾無之候得ば無此上と而已存詰尤於
上はいづくまでも

(高杉晋作)

皇室御回復之所は念々被 思召候御事に付御家來におゐては片時も相忘
れ候ふは不相濟事承知仕居候得共何分にも弟誠心不到高杉までも只身を
潔よく致し候歟と存居候よし於于此悲泣に不堪獨立獨行一身を潔と云ば
其に在苦元より名利は度外と兼る相心得居候に付今更強る心に關し候
事は無之候得ども弟も亦人に在不覺袖をしぼり申候今日申上置候事は何
分にも御任じ奉願候馬關へ罷出候も御斷可申上と一旦は奉存候得ども今
朝

御兩殿様に拜謁仕御暇乞申上亦候御斷申上候も奉恐入候に付足仕候其
中御自愛第一に奉存候勿々九拜

十月十六

尙々冥々に盡し候と申事は所詮六つヶ敷實に不堪慨歎候拜

○ 大和國之助

大和老兄御親拆

木 圭

○ 僧實量をいふ

度々御投書取紛一々御答も不申上奉恐入候京都へ立寄候飛脚歸り候と申事は御書に承知仕一圓存不申候今日手隙候は、參上仕御嘶可申上候只今何時頃と申候事些難申上候弟にも肥前佐賀まで罷越候様申來候彌御上京延引と申事に御坐候得は渡海不仕は不相成事歎と存居候彼僧一條は大分面白二三段之所は用をなし候歎と愚察仕候姦心は無之候と相見申候兎に角我正氣を被奪さへ不仕候は誰か來たとていとやせぬと申氣位に無之此時勢に當り人とはものは言れ不申歎と存候弟は益決心先々昨今安心仕候頓首奉復

十月廿四日

木 圭

○ 岡義右衛門

岡 老 臺御復

○ 出雲備前は長藩老臣毛利出雲守戸備前なり

肥前表へ罷越御用相濟候得ば先日出足之節被仰聞候通に相心得格別之次第無之候得は馬關より直に萩へ廻り出雲備前兩大夫へ山口之御様子申達候都合に落着仕居候に付左様御承知被成置被遣候様奉存候御序ども御座候は、近況も相窺度林山縣まで御書翰御投し置被仰遣候は、肥前歸りに拜見可仕と奉存候頓首拜

廿四日

小五郎

○ 毛利登人(彌八郎)

登 人 様
彌 八 郎 様

○ 竹内翁は竹内正兵衛なり

朶雲御投下折柄外出中に御答も不申上委曲奉承諾候今晚竹内翁來訪老兄御閑暇に被爲在候は、御光來奉待候頓首拜

木戸孝九文書卷三 (文久三年十月)

四百二十五

十月廿日

桂 小五郎

岡 義右衛門様御直

御免

(御免以下
岡義右衛門
の自筆な
り)

御面章之趣承知仕候即刻參館御妨可申上候草々頓首

乃

下へ
岡 義右衛門様御直

上へ
桂 小五郎様

(佐賀老侯
綱島閑叟)

拜啓先夜は不圖之次第に亦當地之光景も相察し申候昨日も鳥渡參上仕候處折柄御睡中に付引取申候承り候得ば閑叟翁も暫上京御延引に相違無之由被相伺申候間明日より渡海仕候心得に御座候右に付いづれ參上仕候心得に御座候得共先日已來鬱散一條始抹相付け置不申は安心仕兼候に付至極々々奉恐入候得共數度之一件無御容赦被仰聞被遣候様平に丸々奉願

上候先は右御願まで勿々頓首九拜

十月念五

木 圭

竹内翁様御内披

(竹内正兵衛)

高許

表命奉拜見候昨日は御來賁被成下候由折柄醉中大失敬御高免奉希候今日は罷出可申覺悟に罷居候處先程より一酌相始候間後刻罷出縷々可申上候九州御向行候苦勞之御事奉察候爰元之義は丸に御掛念被下間敷兼之義は御思捨被成下様奉希候頓首

乃

竹 内

木 圭 様

昨宵御來臨之節何の風情も無之甚欠禮申上候其節御物語りの京變一件何

(高杉晋作
福田快平)

分高杉福田兩人へ御任じ可然と考^カ申候御家來におゐて片時も相忘れ候
は不相濟事は承知仕候に付何分御任じ奉願候書他明朝拜青之上萬縷以上

八日夜

小五郎

(前田孫右
衛門大和國
之助)

前田 兩兄坐下
大和

○

昨夕は態々御光來奉多謝候さて弟心事は逐々申上候通實にやむにやまれ
ぬ次第に御坐候所此節之光景にゐる誠に浩歎至極此上は無是非事何卒御
折も御坐候は、
君上へ被仰上被遣斷然思召を以宿意相達候様御盡力は相叶申間敷哉元よ
り弟正義被申る嬉しき事も毛頭無之因循と被思候る悲しき事も無之いづ
れ御爲を思ひ候上は當時に在るは古より十分と被思候ものは稀なるもの
に御坐候元々勝負之筈を被爲立候る之御周旋には無之候事に付此往之所

も只々御忠誠へ疵さへ付不申候事天地に祈誓仕る所に御坐候先は爲右心
事申上置候間乍此上御憐察御盡力奉願上候爲其勿々頓首拜

十一月十三

尙々暴動有之候るは折角人望も相背け候事に付此處は偏に乍恐
上之御方寸に有之候事に付此處は元より申上候までも無之候得共御力
を被爲盡候御事奉祈候拜

岡 義右衛門様御親拆

桂 小五郎

○

亂筆御推覽奉願候

先以御安榮御起居奉大賀候さて上國之様子も委敷事は近頃不承蔑視する
ものは如豕犬恐怖するものは如豺狼思ひ候歎之人情いづれか是なる歎弟
輩におゐて更に不相分候得共却る外夷等と對話致し見候得は將來之處も
思ひやられ候様之心地仕随分不安愚考仕候乍去將來之手段も無之事に御

座候得は今日速に雌雄を決し候方が増し歟とも被相考申候將來之處は古人之爲にも老臺一御盡力不被爲在るは不相濟儀と奉存候參上仕候而御嘶も相窺度奉存候處今日歸山仕草臥申候間乍失敬申上候先は一書を以御内意拜承仕度爲其早々頓首拜

念六

古友之詩に

世事如低棋著々在人後寄言當局者一敗將誰咎勝筭爭一先天下無敵乎
亡豕補其牢雖拙未爲過失火賞爛頭識者咎他情補過要其早悔遲悔無奈
此二短古有之熟見仕候處如此之遺憾も不少様覺申候得共弟如御承知
文盲其趣主得と不得了解御裏書にも
老臺御高評奉願候拜

小 小 老 臺 御 直 拆

木 圭

○
小 小 老 臺 御 直 拆
條 瀬 兵 衛 な
り

昨夜御答書も拜見仕候に付強而今日出勤可仕と存居申候處惡寒甚敷結髪出來申候間一汗仕見候に付少し快候得は早々出勤可仕と奉存候間御序も御座候は、
御前向可然奉願候爲其勿々頓首拜

十二月一日

高杉東一様

桂 小五郎

○
高杉晋作
また高杉東
一と稱す

○
林は林奎
なり
梨老臺と
あるは長藩
士梨羽直衛
なるへし

今朝は態々御光來奉多謝候先日馬關に罷越候節御用半途に相成居候儀も有之林に面談不仕は不相叶且又杉山松輔にも京都之一條相談し度儀有之候に付終に今日出勤及稽延候間此段梨老臺へもよろしく奉願上候先は右御願まで勿々頓首

十二月十日

大 和 様 御 直 披

桂

○
大和國之
助

木戸孝九文書卷三（文久三年十二月）

四百三十一

(林は林奎)
(梨老臺は長藩士梨羽頼母なるへ)

今朝は態々御光來奉多謝候先日馬關に罷越候節御用半途に相成居候儀も有之林へ面談不仕は不相叶且又杉山松輔へも京都を一條相論し度儀有之候に付終に今日出勤及稽延候間此段梨老臺へもよろしく奉願上候先は右御願まで勿々頓首拜

十二月十一

(大和國之助)

大和 様御直拆

桂

○ 朶雲奉拜誦候過日は難有奉拜謝候

老臺御願之邊は些政府にて相とめ置候よし

(陸山は前田孫右衛門)

上は相運ひ居候歟と存居申候陸山も兩三日前歸山引籠り居申候昨日對話仕今日は出勤仕候都合に御坐候兎角下之疑惑より

(時山は時山直八)

公之御深旨何分にも難下不仕悲歎之次第に御坐候時山も歸り一昨夜直に

事情承知仕候處井老入京何分にも六つヶ敷今日之處にては先は見へ兼申候其已前逐々上京隨分□□被考申候益動益激し候様なる都合に相見へ是又已往にて如何とも難致候得とも不任心底事のみにて遺憾無此上奉存候何卒未來之處なりとも得と諸彥熟考之上御處置有之度爲邦家奉祈居申候此余之處は□機は
公之御斷に御抑揚無之は御料理は出來不申何分にも老臺にも御出勤^カ之は實に此處御輔翼之外被爲間敷と奉存候先は爲其勿々頓首奉復

十八

尙々交代事も定可相運と存申候以上

(岡義右衛門)

岳 老臺御密披 丙丁

圭

○ 拜啓爾後彌

御壯榮奉大賀候二に弟且々消光乍憚御放慮奉願候さて逐々傳承仕候處に

ては天下之光景日々變遷乍去元來

叡慮幕意齟齬仕候より内地之形勢旦夕に相迫り不容易奇變及數度志士仁人痛哭血泣致し居候折柄忝くも二百年來之廢典被爲起當春

大樹公御上

洛之御盛舉終に

玉座御前におゐて積年之

叡慮御遵奉之段御直に被仰上普く天下に御布告有之

公武御合一之廉顯然相立誠に感泣之至に奉存候於于此天下一致敵愾之氣

相生し訖度幕威も相立

神州之御爲恐喜無限事と奉存候處豈計

大樹公御歸府之上議論雜出速に

思召も不被爲屆御様子遙に奉窺候得は正義御確守は只

大樹公と僅々兩三之有司のみ之由實に奉恐入候弟儀は御同様夏中滯京仕

居候處於國元御布告通り及攘夷逐々襲來等も致し候元より

叡慮遵奉

幕意承順仕候事に付今日とても死力を盡し御奉公仕候決心に御座候右之御次第に付於

幕府も其中御貫徹之御場合に可立至と只管奉存候兎に角今更攘夷之儀御搖動可被爲在御事とは不奉存候得共何歟疑惑を醸し候廉も有之候哉列藩有志之黨と相見諸々より傳を以憤懣之趣頻に申越結盟を求候氣味壯年之輩は尙更憤懣に忍ひ兼實に寡君始甚苦心仕候乍去弊藩之滅不滅は元より道之存すると存せざるとに關係仕候事に付天下道絶候時は無是非候間其儀は一國舉る安心仕笑る白刃に伏し候覺悟に御座候得ども差向忍兼候徒に所致實に困窮仕候兎角弊藩之進退は差置自然萬一天下疑惑之通御齟齬之廉有之候は終に外夷之術中に陥り候は申までも無之自ら破り彼れ之を破る之道理に而眞に

神州未曾有之御大變と深く奉恐入候折角御上京之御事に御座候は、何卒公正之議相舉り皇威回復

幕政更張御國是益御一定被爲在候様

神州之御爲御盡力奉仰候先は爲其相窺度奉呈候勿々頓首九拜

十二月二十

允

大島友之

友之允老兄

尙々別番は去京之折正三柳原兩卿へ差出置申候御諒察可被下候本文にも申上候通弊藩之進退處には無之只々於弊藩は道と共に斃候決心は且々相着居孟子之自反而縮と申にも今日歟と相心得居於寡君も大に安心被致居候得共何分本文之通憤懣之余疎暴涉り候儀出來仕候は實に不相濟儀と此處には寡君始眞に不一形苦心困窮之次第に御座候爲其日夜奔走注意せられ候事も有之申候於其御地も自然疎暴之次第有之候也

は不相濟何分にも御存分に御氣を被付被下候様奉願上候

尙又國元之儀御氣付之筋御容赦なく御示諭願處御座候先は勿々敬白

今日相運候事に御坐候得は御歳暮に加判衆へ被仰聞置候も可然事と奉存候何分にも毛翁被仰合今明日中に訖度加判衆へ被仰出度奉存候何分之義御一答奉願上候勿々頓首拜

十二月念十

尙只今御一答相伺候得は大に都合よろしく御坐候間來否之處御一言奉願候弟も十一二日頃迄は所詮滯居も六つヶ敷と奉存候拜

(宛名署名共に欠くも文久三年十二月二十日木戸孝元が同義右衛門に贈りたるものなるべし)

毛翁は毛利登人

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including names like 木戸孝九 and dates like 文久三年十二月.

昭和四年十二月二十日印刷
昭和四年十二月廿五日發行

木戸孝九文書第一
非賣品

木戸公傳記編纂所藏版

木戸公傳記編纂所代表者

編纂者

妻 木 忠 太

東京市四谷區新堀江町三番地

日本史藉協會代表者

印發
刷行者兼

早川純三郎

不許
複製

5492

不
者

民國十二年十二月
民國十二年十二月

水及公海捕魚權

本
水
太

本
水
太

水
及
品

終